

B分科会（概要）

<p>（B分科会） 幼稚園教育と小学校教育との接続の推進について</p>	<p>（協議の視点） 幼稚園と小学校が連携を図るためには、どのような工夫が必要か。 また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についてはどのような活用が考えられるか。</p>
--	--

1 広島市立落合東幼稚園の提案の概要

「思いやりのある優しい子供を育てる」の教育目標のもと、「一人一人のよさをいかし、それが周囲の子供たちへも伝わっていく保育」を考えていきたいと願っている。「その子のよさ」を「その子らしさ」と置き換え、それを十分に発揮しながら遊ぶ姿を「本気の姿」とした。

隣接する落合東小学校でも1年生の目指す姿を「げんき」「こんき」「ほんき」としており、共通する部分がある。幼保小連携を考えるにあたり、双方の目指す子供像に視点を当て、援助や環境構成を探ることでより学びや育ちのつながりを接続することを目指している。特に、幼保小の教師等が互いの教育内容を理解し合い、よりよい保育・授業づくりを行うために、研究主題を「本気で遊びに取り組む子供を育成するための環境づくり」とし、（1）交流保育・授業を通して幼稚園、保育園、小学校の教師と保育士が互いの実践を振り返ることで双方の教育や保育への理解を深めること、（2）それぞれの教師、保育士が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに幼児や小学生の姿を考えることで、子供たちの成長や教師の働き掛けの意図を理解し合うことに取り組んだ実践である。

2 協議内容

（1）協議の視点

幼稚園と小学校が連携を図るためには、どのような工夫が必要か。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についてはどのような活用が考えられるか。

（2）質疑応答

- 幼保小の教職員同士の交流の場をどのように持っているか。
 - ・ 事前事後の話し合いは落合東幼稚園を会場に夕方約1時間行っている。
子供の交流形態はその年の在籍人数やクラス数によって組み替えて行っている。私立幼稚園・保育所は子供の人数も多いため、秋フェスタなどの行事に交流するようにしている。
- 教師の意識改革をどのように行ってきたか。
 - ・ 平成27、28年度に県の指定を受け研究開発事業を行った。その時に作られた連携体制や接続カリキュラムをもとに見直しを行いながら交流を行っている。体制等の土台ができていたため担当等が変わっても続けてこられている。
- 職員同士の合同研修会などを行っているか。
 - ・ 落合東小学校合同研修会に公私立幼稚園、保育園が参加している。夏休みの間に行うため参加しやすい。校種を超えて先生同士が顔見知りになり、2学期に向けての話をする機会にもなっている。また、救命救急講習会、プール清掃なども一緒に活動を行っている。
決められている研修のほかに、園だよりや学年だよりの交換をする、小さい事でも顔を合

わせて話すなどを心がけている。

- 小学校の先生は「教科と絡むように活動内容を考える」という思いが強いのか、計画を立てるときに難しいと考えられているように感じる。教科との絡みについてはどのように話をしているか。
 - ・ 子供はできることやわかることをすることが好きである。小学校の先生の得意なところから切り込んで行くことから始めたらよいのではないか。
 - ・ お互いの強みと弱み、特徴と傾向が分かることが連携接続をしていくときのポイントになる。

発達経験がみな違うためつなぎ目を見ると難しい。つなぎ目の部分を私たちがよく理解していくことが大切。自分たちのやり方や文化を伝えていくことも必要なことである。

(3) 協議

(幼小の先生でグループになって協議)

- 子供の姿を互いに話し合うことが大切である。話をする中で、子供たちの好きな遊び等を知ることができた。幼保小のお互いが気軽にやり取りできる機会づくり、体制づくりが大切である。
- 複数の小学校へ入学するが、地域によって接続に対する取組や職員の意識に差がある。また、小学校と幼稚園・保育所等でも温度差を感じる。園・所等、小学校のそれぞれの立場で率直な意見を出し合い、みんなで考え育てていくことが「つなぐ」ということにつながる。幼保小でお互いの取組や考え方を理解し、歩み寄ることが大切である。
- 幼保小で話し合ったが、最初は何をどのように話せばよいかわからなかった。しかし、「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」に照らし合わせて話をしていくと、両者にとってわかりやすくよかった。
- 小学校のめあて、幼稚園のねらいを明確にした交流にする必要がある。また、“交流して終わり”ではなく、振り返りを大切にしていく。

3 結論

- (1) 「幼小連携」から「幼小接続」へ変わってきている。一緒に活動をしていく事から発達や学びをつないでいくことへ取組を進めていくことが大切である。
- (2) 幼小が一緒に活動することが目的ではなく、それぞれがねらいを持っているということが大切である。活動後の話は、子供たちの姿から育ちを読み取ることができる良い機会であり、身につけるべき資質能力、幼小の独自性と共通性を理解していく為にも大切である。
- (3) 小学校と幼稚園では文化の違いや思いの違いもある。合同研修の時などに「10の姿」を一つのツールとしてポイントを押さえながら話をしていく。10の姿を活用することで子供を多方面から見ることができ、今まで気づけなかった見方に気付くとともに教師の見方が変われば子供の経験の幅も変わっていく。